

土佐のわらべ

第429号《第451回（2017. 9. 14） 子どもの本の読書会記録》参加者5人・文書参加3人

『マルの背中』 岩瀬 成子／著 講談社

今年はとりわけ暑い夏でした。午後ともなると人影は絶え、景色はどこも白く紗がかかり、辺りに響く蝉の声はその騒々しさ故に意識下に沈静し、この世界に存在するのは自分ただ一人であるかのような、そんな気がしたものでした。

課題本の主人公亜澄は、お母さんと二人で暮らしている小学校三年生の少女です。この夏休み、亜澄は近所の駄菓子屋で飼われている白猫のマルを預かることになりました。マルの背中には一か所だけ灰色の丸い柄があります。そこを撫でながら頼みごとをすると願いが叶うと言われている猫でした。両親の離婚、子どもの貧困などを背景に、亜澄の視点で描かれた作品です。

読書会では次のような感想が語られました。

・小さな事にも感情が揺らぐ、そんな自分の小さな頃を思い出した。大人になった自分が困る事と、親に頼っている子どもが困る事は違う。この作品に登場するお母さんも追い詰められている。子どもに弱音を吐いてはいけないけれど、我慢しきれなくなっている。ただ、子どもの不安は、また違う。お母さんの安定がすごくうれしいという子どもの気持ちがよくわかった。

・現実の子どもがどうこの本と出合うのか。出合ってもらいたいけどどう出合うのだろうかと考えた。

・優れた文学は今の時代に敏感なのだと思います。
・子どもは親の言葉を真剣に聞いている。子どもは真正面から大人の言葉を受け止める。たとえ大人が何気なく言った言葉であっても。そこに大人と子どものギャップが生まれる。

・子どもが真正面から受けとめているものを、大人がどうとらえるか。

・亜澄は大人の心情が分かる年齢。あと一、二年もしたらもっとうまく立ち回れるのにと年齢。その頃の自分を思い出して読んでみた。

・家族は他人以上に共通認識を持つのが難しいと感じた。

・主人公と同じような境遇の子どもは、こういうものを読みたいか、また、全く異なる境遇の子どもは理解できるのか疑問。

・最後の行「白っぽい土の小さい公園には誰もいなかった。」には亜澄のどんな心情が映されているのだろう。

・亜澄はマルを通して自分の心の芯のようなものを見つけて、いろんなことに気付いたり成長したりしているが、本当なら周りの大人に、そういう存在になってほしいと思った。

・お母さんの仕事が見つかった時、「体の中からするすると、いろんなものが流れ出ていく気がする」とあったが、この表現はうまいと思った。私の体からも亜澄の不安ややるせなさが抜けていったように思う。

・マルがいてくれて良かった。命ある体温あるマルの存在は確かに亜澄の支えとなったと思う。一人でいるより誰かといる方が絶対いい。

涼風が吹いて酷暑も去り、いよいよ芸術の秋、読書の秋がやってきました。この秋、どんな本と出合えるのか楽しみです。

(N. T)